

ラウンド・アバウト・ミッドナイト

七原ハルコ

Round Midnight

券売機から吐き出された硬貨の温もりはすぐに消えてしまった。三月の初めに買ったばかりの踵の低いパンプスは、すでにくたびれかけている。のそのそと歩いていく横を、ピンヒールをカツンカツンと鳴らして、見るからに水商売関係だろう女性が行き過ぎていった。エスカレーターをくだる。四人掛けの白いベンチに座ろうかと思ったところで、すぐにベルが響いた。

私の田舎に地下鉄はなかったが、ようやく、自殺防止のための可動式ゲートを見ても驚かなくなるくらいには慣れた。普段使っている路線は自動ドアのようなタイプで、腰くらいの高さの黄色い柵を見たのは初めてだったが。

駅と駅との間隔は狭く、窓ガラスに鏡のように映っていた私の顔は、すぐに白い明かりに消えた。聞き慣れない地名が読み上げられ、どんな字を書くのかと、ホームの表示を見た。思った以上に単純な漢字が四つ並んでいた。手の

中の携帯には掲示板の書き込みがずっと表示されていて、しかし言葉の意味は頭から閉め出されている。何も考えず、からっぽのまま、しばらく揺られていた。環状線の外に出たことにアナウンスで気付く。鉄道は街の中心から放射状に伸びている。そのさきっぽへ近づけば近づくほど、他の路線は離れていく。向かいに座り、先ほどまで居眠りをしていた男性が、慌てて降りていった。電車は地上に出て、高架橋を伝っていく。日付が変わっているのに、街はまだきらきらとしていた。その輝きも、進むにつれ段々と弱まっていく。終点から二駅手前の駅で降りた。改札口を出て左の階段を上がると、歩道橋に繋がっていた。渡りながら暗い、と思った。途端に肌寒さを感じる。信号が赤から青に変わる。それを待つ車は一台もいなかった。歩道橋の階段を下りて、駅とは反対方向へ歩く。ぼつりぼつりとある街灯だけが煌々としていた。

川沿いを歩き、橋を渡り、坂を上る。ここに来たのは初めてだったが、私は何をすればよいか知っていた。並木と公園、その先に現れた住宅地。仲良く並ぶアパートの中に一つだけ古びた、高い建物がある。玄関からすぐのエレベーターのボタンを押した。扉は間もなく開いた。五階のボ

タンよりも先に、「閉まる」に人差し指を付きたてた。

弱々しい電灯を頼りに進んだ廊下の外壁には、確かにガラスも鉄格子もない。頬に手を当てる。とどちらも同じくらしいつめたさだった。景色は暗くてよく分からないが、川の向こうにちかちかと光って見えるものがあつた。それは色を変えながら点滅する。あれは何だろう。

目を凝らしているその前を、何かが落ちていった。

形容のしようがない、鈍い音が響いた。何が起きたのか考えるまでもなく、見てはいけないうものを見た、こわいものを見たのだと心臓は暴れ出した。

音が響いてすぐ、軋む扉の音がした。しばらくすると誰かが走る音が聞こえた。私の足は根を張つたように動かなくなつていた。再びぎいばたん。その音を聞いて、ようやく私は胸より低い高さの外壁に手をつけて、顔を出し、下を見た。エントランスの明かりに照らされているのは、横たわるスーツ姿の男性だった。脚は変な方向に曲がつており、頭の辺りからアスファルトに赤黒い丸が広がっている。灰色のパーカーを着た人がその男性の首筋に触れ、そして離れた。その人は立ち上がり、あんま見るな、と唸るように言う。声の低さから性別が知れた。灰色の彼がポケット

から携帯を出して耳に押し付けていると、もう一人、ピンクのスウェット姿の女の子が出てきた。見るな、は彼女に言ったのだろう。そうしている間にも赤い丸はどんどん広がっていく。人が死ぬところを見てしまった。

足が勝手に一歩退くのと、女の子と目が合うのが同時だった。彼女は建物に駆け込んでいく。動悸が止まない。今の私は完全に不審者だ。エレベーターの軽快なピンポンと、背後からのぎい、ばたんが混ざり合つて耳に届く。

「そこであなた何してるの」「ちよつと、人落とした？」

背後には髪の毛の長い華奢な女性、エレベーターからは小柄な女の子。ぱくぱくと口を動かしした後、声がやつと出た。

「違います私ここ見に来ただけで」

自殺志願者？ と少女は切りそろえられた前髪の向こうから睨んでくる。首を振つた。私は自分の携帯を彼女に押し付けるだけで精一杯だった。それを見て来ただけです。

「若い子がもう電車もないような時間に？ どこから来たの？ 帰るときのこと考えてない感じじゃん」

まばたきをする。勝手に目は濡れて、鼻の横を伝つて口に入った。とりあえず警察来るまでここに居ようね、と女性が言った。赤いランプが遠くに見える。真夜中。

It's Only A Paper Moon

朝、アタシは時計のアラームを止めるより先にカーテンを開けることにしている。そうすればすぐに目が眩んで頭が動き出す、とはなかなかいかない時もあるけれど、その日は真向かいのアパートの裏手にパトカーが停まっていたから、あら、と思つて比較的目覚めるのが早かった。向かいのアパートは古い割に五階建てだし、張り出した廊下の外壁は乗り越えやすい高さつてこともあつて、自殺スポットとして使われることはたまにあつた。

前にネットをしていて、事故物件マップ、つていうのを見つけたことがある。人が死んでいたり、暴力団が近くに居たり、宗教的な施設の跡地だったり、権利関係がややこしかったりする、いわゆる「いわくつき」の建物がどこにあるか地図で表したものだ。試しに今のマンションの近くを調べてみたら、向かいのアパートの周りに赤いピンがぎゅうぎゅうに示されていてヒいてしまった。このマンションの家賃が相場より安い理由も分かつてしまった。

けれどアタシにとってそれは気にするほどの問題じゃなかった。普通に生きていれば関わり合いになることもない。

怪談とかホラームービーとかアタシは結構平気な方だ。一番怖いのは生きている人間だと思つているから。

いつも通り玄関の牛乳箱から牛乳を取つて、青い箱の隣に、板のようなものが立てかけられていることに気が付いた。割と大きくて手に取ると軽い。コンタクトも眼鏡もしていない、ピントの合わない目でぼんやり眺めて、それがコルクボードだと分かつて、それにべたべたと写真が貼り付けてあるのをようやくはつきりした目が映し出した。アタシと、半年前別れた彼氏のツーショットばかり。ああこれはあの人の部屋にあつたものだ絶対そうだ、と思つたら何だか怖くなつてしまった。引越した先の住所が割れているのは共通の友人に口の軽いどうしようもないのが居るから特に疑問も抱かないのだけれど。昨日の朝、こんな物ありはしなくて、そしてアタシはたまの休みで日がな一日家でゴロゴロしていた。チャイムを鳴らせばいいのに、黙つてこんな物を置いていくものだから気味が悪い。あんな結局、何がしたかつたの、つて、大事なものはそこだ。

とりあえず牛乳瓶二本とそれを持って部屋に戻つた。テーブルにコルクボードを置いてインスタントのコーヒーを入れる。例えば、写真に写るアタシの顔に落書きをすると

か、ちぎってしまうとか、ピンを刺すどかしてあれば、それは恨みがこもった嫌がらせだ。何となく理解できる。お互いにお互いの悪いところを我慢しきれずに別れたものだから、一方的に恨まれるのは納得いかないけれど、モトカノに対しての行動としてはいくぶんか「それらしい」。

どんな気持ちだったか分からないから怖いんだ。別れを引きずっていたのだろうか。けれど半年というタイムラグはちよつと長い気がする。それこそ、返すんじゃない捨ててしまえばいいのに。あるいは、写真を封筒に入れてポストにぽいするなら分かる。こんな大きめのコルクボードごと渡す必要がなぜあるんだろう。

牛乳瓶の、プラスチック製のフタを開けて、マグカップのコーヒーに少し混ぜた。猫舌だからちよつどいい。椅子に座って牛乳たっぷりのカフェオレを飲むのがアタシの朝。このコルクボードは、彼の部屋の一審奥にあるメタルラックの上から二段目に鎮座していた。写真だけじゃなくって、映画の半券やコンサートのチケットなんかも一緒に貼ってあったし、色とりどりの押しピンを刺して、旅行した先で買ったキーホルダーなんかもひっかけていた。二人で買ったものはコルクボードの周りに配置。メタルラックの

二段目は、彼の部屋の中でアタシが一番存在する場所だった。今ボードに貼ってあるのは写真だけだ。その配置が、前と少し違う。一度外したのかな。押しピンを全部外してしまった後も、はだかのコルクボードを見て、アタシのことを思い出したのかもしれない。見るのも嫌になって、こうして無言の返却に至ったのかもしれない。けれど、多分今もあの人、すつきりと片付いた二段目に何も置かないままにしていると思う。それだけはどうしようもなく分かっってしまう。だって愛していた。けれども彼への気持ちなんて薄らいでいる。五年間が一回でまっさらになっちゃって、そういうケンカを、した。

マグカップの底に、砂色のカフェオレがうつすら残る。アタシは椅子から立ち上がって机の上の双眼鏡を手にとった。ベランダに出て、いつものようにいわくつきアパートの二階を見つめる。名前も知らない、恋しい人はベランダから下を覗き込んで青ざめている。本物の愛なんてないって思ってきたけれど、彼と道ですれ違った時に体に電流が走ったのだ。きつと運命。アタシ恋してる。あなたのことなら何でも知ってるよ。そしてあなたが見つめ返してくれたら、きつと愛はニセモノじゃなくなるんだ。

Lullaby of Birland

監視カメラに男性が一人で飛び降りる姿が映っていたから、五階の廊下で呆然としていた彼女は無関係だと知れた。

彼女はネットの掲示板で数年前に有名になった文章を見たのだと言った。観光案内のように電車の乗り換え、このアパートまでの道を教え、最上階まで連れ出して、最後は「顔を出して、身体を十分に乗り出して。そしてそのまま飛び降りて死ね」で終わるもの。死ぬ気などない、と彼女は言った。しかし夜は長い。人が飛び降りると例の如く外に飛び出すたまちゃんとアキくんが、カラオケはあっち、ファミレスはどこそこ、とやりだすのを制止して、私の部屋に招いた。ここは暗いし、彼らの挙げた場所までは距離がある。何より彼女はまだ動揺しているようだった。何かあったら連絡を、とアキくんは自分の部屋に戻っていった。言い切り方が素気ない。彼女を落ち着かせるよう穏やかに話していたが、内心は相当荒れているのだと思った。それは多分。パーカーの袖に付着した血糊が理由ではないのだ。しばらくたまちゃんと彼女に温かい紅茶を出して始発を待っていた。彼女は、悩み事はないと言った。一か月前

に実家の犬が死んでしまつてショックだったが、もう立ち直つたし、昨日家で皿を一枚割つてしまつて落ち込んだが、それだけで死にはしない。そう他人のベッドに丸まり、ピシンの毛玉と化して眠るたまちゃんを横目に彼女は言った。そうだろうか、と今はテーブルに突っ伏して寝ている彼女を見て思う。例えばペットの死で九割九分疲れ切つてしまつた心には、あと一パーセントの痛撃が耐えられなくなつたりするのではないか。なみなみと水を湛えたコップに一滴の水滴を垂らすように。しかし深く関わる気は起こらなかった。私が今起きているのも彼女を心からは信用していないからだし、さつき会つたばかりの人間に共感を抱きようはずもない。彼女の痛みを私が知ることはないのだ。

幼い頃、巢から蹴り飛ばされた雛鳥を拾つた。すると父に人間の臭いが付いたら、親鳥は子育てをしなくなると言われた。取り返しつかないことをしてしまつた。掌に雛の忙しない鼓動が伝わってくる。箸で虫を与えたり、温めたりしていたが、程なくして死んだ。雛鳥のくりくりとよく動く、黒々とした目は、死を悟つたのか日を追うごとに透き通つていったが、事切れた時には白く濁っていた。

五つ子のコツメカワウソの写真が撮りたくて、学生最後

の年に水族館に行った。順路の最後に触れ合いコーナーがあつて、ヒトデとサメとエイに触れるようになっていた。エイのしっぽには触るなど注意書きがあつて、本当に大丈夫なのか不安になりながらも触った。泳ぎ続けなければ死ぬ、と言われているサメだが、海底でじつとして種類もいろいろ、触れ合いコーナーにいるのもそれで、尻尾以外は動かない。触れてみる。すこしぬるぬるとして、ざらついた感触が手に痛かった。サメの方も人の体温や油で弱っていくのかもしれない。隣で水を跳ねさせて騒ぐ子供の肌を避けるように時折、すい、と泳ぐ。

この前、親友を家に泊めた。来た時にはすでにお酒の匂いをさせていた。きやらきやらとよく笑つて、しかし次第に無言になつて、そして床で寝てしまった。飲み慣れていない彼女の傍でずっと起きていた。彼女が泣きながら眠っているのに気付いても頬を拭うこともしなかった。普段は殆ど会うこともなく、思い出したかのようにたまたま話をするだけの仲だ。ただ身じろぎもせず眠る、その静かな呼吸音さえいとおしく感じてしまう程度の仲だ。私は親友のことが好きだったが、それはあくまでも友達としての好意のパターンでしかなかったから、触れられなかった。それ

は彼女の好きだった人が結婚した日だった。さわる。互いの境界をくつつけあう。混ざらない。温度以外は。さわれない。

ふと小さな声に気が付いて顔を上げた。たまちゃんがベランダに出て、鼻歌を歌っているのだ。それは英語の古い歌だった。僕が君の涙を乾かしてあげる。僕が激流にかかると橋になつて君を支えてあげる。そういう歌詞の曲だ。名前すら知らない彼女も、いつの間にか起きていてピンクのスウェットの後ろ姿をぼんやりと眺めている。

こわかつたです。私、死ぬのこわくなりました。

彼女は目線をたまちゃんにやっただまま呟くように言つた。おはよう、と私は言つた。おはようございます、と彼女は答えた。紅茶ご馳走様でした、本当にお世話になつてしまつて。そういう目が赤かつた。玄関までたまちゃんと見送る。電車、寝ぼけて線路に落ちないようにね、とたまちゃんは言つた。今はホームドアがありますから、と彼女は返した。もう二度と会うこともない。

手を振り、見送つて振り返ると、二階の廊下にアキくんが立っていた。お疲れ様、と無表情で言う、彼の透徹とした目に、手の中で一度だけ鳴いてみせた雛のことを思つた。

The Chicken

ぼくはハンバーグがすきである。だからこのようなままのぎんぎやくなふるまいをほつといてはおれぬ。ピーマンにハンバーグをつめるだなんて！ ハンバーグだけえぐりだしてたべたらままはかなしそうなかおをした。(以下「大人」訳) ピーマンを食べないと病気をしたり風邪をひいたりする、というその根拠は一体何なのだろう。ばばはしいたけを見るなり涙目になって箸でひよいひよいと皿の隅に除けているが、少々めたぼりつくだけでとても元気だ。つまり一つの食品を食べなかつたからといって、大した問題はないのだ。ピーマンに入っている栄養は他の何かで補うことができる。朝の料理番組でかっこいいお兄さんが使うおしゃれな野菜や、バラエティでおいしそうな料理に使われているフォアグラなんて僕は実際見たこともない。

—なのにままはどうしてこうも僕にピーマンを食べさせたいがるのだろう。馬鹿正直に聞いたところでは本当のことが聞きたせるとは僕は思っていない。きつとままは嘘を僕に言うてきかせるだろう。一つ嘘をつくためには三十の小さい嘘をつかなくてはならないらしい。僕にピーマンを食べさ

せようとすままだが、僕はままが好きだ。そんな大変なことはさせられない。だから僕は聞かない。ある日僕がテレビを見てみると、ピーマン星人を名乗る者が出てきた。ピーマン星人！ 僕はこれを報道した人物のジャーナリストム魂を高く買いたい。何故ならこの番組はある日急にしなくなったのだ。ピーマン星人に消されたに違いない。

今ままは僕のおやつホットケーキを焼きながら、またよ、だとか、ここはこそだてにはむかない、だとか肩に電話を挟み、おはなししている。ピーマン星人と交信しているのではないかと思つたが、ままに電話を代わってもらつたら相手はおばあちゃんだった。しかし安心はできない。ままは間違いなくピーマン星人に洗脳されている。ピーマン星人は僕のような子供に緑の忌々しい劇物を与え、何かを何かして、アレをアレしたりする計画を立てているに違いない。最終的には巨大なピーマンロボが出てきて世界を征服するのだろう。しかしその計画のしつぽをどう掘めばいいのだ。途方に暮れベランダに出てシャボン玉でハードボイルドに一服していると、下にパトカーが停まっているではないか。わあい僕。パトカーだいすき！ 運動会のかけっこの一番だったときもらった双眼鏡でパトカーを見た。

白と黒と赤だった。ついでに飛ぶ鳥を見ていたその時、向かいのおうちで黒い服を着て双眼鏡を構えている女を見つけた。あれはきつと「えーじえんと」だ。えーじえんとは何をするのか分からないが、とにかく悪い輩に決まっている。増えたりイーッって叫んでうるさかったり蹴ってきたりするはずだ。蹴られると痛いのだ。双眼鏡で人の部屋をじろじろ見る女なんて碌なものじゃない。女の構える双眼鏡の向きから見ると、僕の二つ真下の階を観察しているようだ。そこにもきつとピーマン星人のえーじえんとがいて、奴らの発するピーマンビームにわがママは操られているのだ。それくらいどうしようもなく強い影響がなくて、どうしてわが子を平気な顔して苦しめることができよう。

そうと決まれば僕は部屋を出る。ままはどこにいくの、と言ったが、僕は、たっくんたちと遊んでくる、と言った。向かう先は一つだ。エレベーターの二のボタンを押して、女が見ていた部屋のドアチャイムをものさしで押した。押してからよくよく考えると無策であることを後悔した。相手は星人だ。こんな子供が敵うはずがない。しかしあんなに堂々とえーじえんとをベランダに立たせているなんて、きつと星人はまだ計画がばれていないとタカを括っている。

まして子供が自分たちの悪行を阻止しようなどと思うまい。この姿で油断しきっているところを攻撃するのだ。先手必勝、二の太刀要らず。これ勝負の鉄則なり。しかし敵は出てこない。もう一度チャイムを押した。ガン、だかゴンだか鈍い音がしてしばらくしてから扉が開いた。

「どちらさまですか、……あれ、ぼく、どうしたの」

出てきたのは少し赤い顔をした、優しそうな大人の男の人だった。彼とは顔見知りだ。朝はスーツを着た彼と途中で同じ道を通り僕は学校に行くし、あいさつもする。いや、それもこちらを油断させるための罠だったとしたら？

「ごめんなさい！」

僕は謝りながら彼の向う脛を蹴飛ばした。彼は咳込みながらへなへなとしやがみこんだ。勝った。

そのあと駆け足で凱旋（エレベーターのボタンはものさしで押した）を果たし、僕は満足しながらお風呂呂に入って、仕事に行くままを見送り、一人でご飯を食べ、寝た。

深夜トイレに起きたら、ままが帰ってきていた。あの子が風邪ひきませないように、と咳きながらピーマンをはじめとした野菜をプロセッサで細かくしていた。僕の朝ごはん、お弁当。僕はままに飛び付いた。少しだけ泣いた。

Cry Me a River

彼が髪を切ったことをその四日後に知った。付き合っているという言葉が空しかった。すれ違うだとか、向いている方角のズレだとか、そういうことではなく、鳥と魚みたいに、まるつきり、生きるのにびったりな世界が違っていたのだろうと思った。最初は上手くやっていけていたのに、と思うのも、ただの盲目だ。今になってその決定的な世界の断絶が、はつきりと分かっただけの話なのだろう。

別れようかと、どちらが言い出すでもなく、これが最後だと互いを感じていることを、二人とも理解できていたのだと思う。最後のお願ひ、この日だけは開けておいて、と約束したのはあたしからだ。散々合わなかった予定が、こんな頼みごとをするだけで噛み合うのだから悲しい。何がしたい。何でも叶えてやるよ、と台詞だけは格好いいのに、弱まって消えた語尾には、最後だから、と付けるはずだったのだろう。あたしは観覧車に乗りたいたと言った。彼は毎月イベントの変わる、人気のテーマパークの名前を出した。首を振る。はじめてのデートの、と言えば彼も同じ場所に思い至ったらしい。あの時と比べればやや客入り

の落ち着いた複合施設の、屋上に設置されたそれなりに大きな観覧車だ。彼はゆっくりと頷いた。それじゃあ、帰ろうか、とあたしは喫茶店の席を立った。

二人揃って同じ趣味をしていた。それによって引きあつた。考え方も似ていた。燃え上がるというよりは、ほんのりと熱を伝え続けるゆたんぼみたいな、そういう関係だったと思う。何年か経ち彼は趣味を仕事にした。才能だと友人たちが口を揃えて言った。才能と努力だよ、と同じ部屋に帰ってからあたしがむきになると、彼はからかうような仕草であたしを背中から抱きしめた。

あたしは運動神経を母のおなかの中に忘れてきた人間だ。エスカレーターに乗る時も降りる時も足に無駄に力を入れて、手は自然と握りこぶしを作っていることは、彼以外の誰にも知られていない。一足先にさつと彼は動き、そしてあたしの手を引いた。そうしてスムーズにあたしはスカイブルーのゴンドラに乗り込んだ。

三半規管が弱くて、遊園地に行ってもほとんどのアトラクションに乗れないから、観覧車が好き。そう言ったこと

を覚えてくれていたのか、初めて二人きりで出かけたのがここだった。あの時は何を話しても面白かった。話が続かなくても決して気まづくならない雰囲気心が心地よかった。もっと恋人らしい、他人からすれば鳥肌ものの甘い話でもすればよいのに、二人して観覧車の順番待ちをしている時からの他愛ない話題をひっぱったままだった。しかしそれが何の話だったかは疾うに忘れてしまっている。彼が話しながら押し下げ式の窓を興味深げにいじっていたら、突然すごい音を立ててそれは全開になってしまった。二人で引っ張り上げてみても中々元の位置に戻らず、同じ側に立つだけでゴンドラはアンバランスに揺れた。五回くらい繰り返して、ようやく窓が元通りになった時には、あだし達のゴンドラはてっぺんを少し過ぎてしまっていた。観覧車の一番上でキスをすると言々、といったおまじないの類を信じて、期待していたわけではなかったが、ほんの少し落胆した。彼のことを好きなのだと思っていたのはその瞬間だったと記憶している。こちらの気持ちを知ってか知らずか、彼は頂上過ぎてしまったね、と笑った。ひどいよ、とあたしは言って、何かムードのある話してよ、とせがんだ。

「あの川の向こうに、ちよっと古い五階建てのアパートが

あつて」

そう彼はゆっくりと口を開いた。

「いわくつきでな、飛び降りて何人も死んでて、出るらしい。アレが」

「ムードって、雰囲気があるってそういう意味じゃない」

あたしは笑いながら彼の肩をばしばしと叩いた。

あのとときと何が変わったというのだろう。

「これまでさ、お前が居なかったら、多分だめになってた時が、何度もあつたよ」

「……やめてよ」

観覧車の頂上でキスをしたカップルは、ずっと上手くいくらしい。他のゴンドラを見下ろしながら、それが過ぎ去ったことを知った。今更おまじないをしても、もう効きはしないだろう。黒い川面にはうつすらと光のグラデーションが落ちる。二人揃って、過去形になってしまった恋を永遠にする方法を知らずにいた。あたしはきつと、今こうしていることを「きのうのこと」にしたくないがために、今夜は眠れない。

二人分の沈黙を乗せて、観覧車はゆっくり降下する。

仲良くなれるのかもしれないと期待していた後輩は、私がトイレに行っている隙に、勝手に大きなパフェを注文していた。やっぱり女の子だもんね、甘いもの好きだよねと言う。私は、ひ、と少し息を漏らしたままその日は少しの相槌を打つこと以外できなくなってしまうていた。この前眠気覚ましにブラックコーヒーを飲もうとしたら不機嫌になったのは女の子甘いものが好き、というセオリーを壊したからか。こいつの前で鮭とばをかじりながら焼酎かつくろうような真似をしたら怒鳴られるんじゃないか。

五階に住んでるめーさんは、そういう人、嫌だな私も、と共感しながら、割れやすい私の爪にエナメルを塗ってくれた。夜明けを待つ空のような、どこまでも深い青だ。彼女はネイルスタジオで働いている。こんなに細い筆で描かれた繊細な模様を見ると目眩がしそうだ。女失格。久しぶりに鍋でもしたいね、とめーさんは言った。アキくんがバイトの無い日にしようね、と私は答えた。このアパートで仲がいいのは二人だけだ。個人主義な二十一世紀に建物に住んでいるだけで二人も友人が出来ただけでも奇跡だと

思う。めーさんは細い。そして美人さんだ。アキくんは背は低いし私と同じ一重なのに、目が大きいのがいいと思う。しかし私は鏡を見てため息をつくこともしない。そんな暇があればギターを構っている。リッケンバッカーの六二〇。見た目がかっこいいそのギターはかなりの高級品だ。私はそれを中学生の時に兄から貰った。今なら兄が手放した理由が分かる。同じ会社のギターをデビュー当初のビートルズが使っていたが、ハードロックが流行り出したら用なしになったらしい。あまり激しい感じの曲には向かない。エフェクターという、音を変える装置に繋いでみても、あまりノリがよろしくないらしい。ハウリングが起きやすい。扱いづらい。そんな癖のあるギターであるとは露とも知らず、手なづけようと私は毎日必死だった。

大学では音楽系のサークルに入っている。そこには伝説的な人気のインディーズバンドのサポートメンバーだったというベーシストがいた。いずれ音楽でごはんを食べようという覚悟があるだけあって、腕前はかなりのものだったし、面白い曲を沢山書いていた。私は大して彼と仲良くは無かった。女関係がだらしなくて、友達をこっぴどく振ったことが許せなくて、私は年上の彼に噛みついてばかりだ

ったし、彼も私にガキみたいな煽り方で絡んでいた。彼はサークルの中で上手い人達を集めてバンドを組んでいた。私は誰とも活動していなかったが、彼のバンドのギターやドラムの先輩に構ってもらっていた。世間の恋愛至上主義な可愛い女の子たちみたいに、競って自分を磨くことをしてこなかった自覚があったから、ちやほやしろとは思わない。一人の演奏者もどきとして扱われるだけで満足だった。

ぶすこ、が私のあだ名。ぶすこしたまま毒島環。なんだかとげとげした字面が私の名前。たまにストッパーと呼ばれることがあった。周りの和気藹々とした会話を凍りつかせているのだからか、と恐れていたら単に主役が同じ名字の野球漫画のことだ、と昨日暇つぶしに入った古本屋で知った。とりあえず二巻まで買った。読み終わったら全巻買いに走った。

古本屋のくせに、新しい雑誌も売っていたから、音楽系のを二、三冊冷やかしてみる。一つの雑誌に、かつて同じサークルだったベシストを、先輩の名前を見つけた。新しく結成されたバンドの、ファーストアルバムの発売を報せるもの。写真、短いインタビュー。うわ、と思った。ちりちりと胸が焦げるようだ。苦しい。音楽でメシを食う世界が、自分の存外近くにあるのだ。

互いに憎まれ口ばかり叩いていた。ある時、机に放置していた私の自作曲の譜面に、彼が色々感想やアレンジを書きこんだ時があった。苛ついて私も彼の譜面に書き込みをした。それから作曲して楽譜を送ってはつつ返し叩いては認めて、の繰り返しだった。五線譜の上ならノーガードで殴り合っていた。友情の色も師弟関係も無かった。

一度だけ、卒業公演で四年生ギタリストの代わりに、一緒に演奏したことがあった。それだけだ。このページの真ん中でキメ顔作ってるこの人でなしと同じステージに立つたことがあるのだ。今やプロのミュージシャンの、遠い人。扱いづらかったろう。周りにヨイショされる中で一人吠えまくる自分は随分異質に映ったことだろう。彼の指摘も嫌味も罵倒もセクションも年下相手だという遠慮がなかった。一ミリの歪みも無く、私を見てくれたのだと思う。

ああ、上手くなりたいなあ、と思う。

よくそれメインで使うよな、とリックケンバッカーのベイスの愛用者である彼は言った。そのままの、クリンントーンが綺麗なんだ、と答えた。部屋の隅でそれは私の爪と同じ夜の闇の色をしている。ミッドナイトブルー。燃え尽きかけた、きらきらしたものをもそっと抱え仕舞いこんでいる。

Calling You

昨日人が飛び降りたらしい。朝になって新聞を取りに行つて白い布と黄色いテープの惨状で気付いた。そのことよりも気付かずに寝ていたことに愕然として、新聞を取るのを忘れた。ベランダに出る。パトカーが停まっている。ああやっぱり死んでいるのだ。真向かいのマンションで何かちかっと光った気がしたが、そんなことがどうでもよくなくなるくらいに頭が重い。熱を計つてみたら三十九度二分。数字を見た途端に頭痛がひどくなつたような気さえする。会社に電話をしたら、病院に行つて、インフルエンザでもそうでなくても休め、と言われた。普段はどやされてばかりだが、いい上司を持ったものだと思ふと泣きそうになつた。病気になると思ふと心が緩んでいけない。

マスクをしてタクシーを呼んだ。待っていると、エンツランスで女性と会つた。ほっそりとしていて相変わらず美しい。風邪っぽくて、と言うと、大変ですね、と本当に心配そうに言われた。病院に行つたら、見事にインフルだと診断された。今年は流行る型の予想が外れて、ワクチンを打った人もばたばたとかかっているらしい。笑つて言うこ

とではなかるうと医師を叱りつけてやりたい気持ちをぐつと堪えた。かかり始めに三日間薬を飲めば比較的薬に治すことが出来るらしい。とにかく水分、食べれるようなら食べて、よく寝ることです。そう医師は言つた。分かり切つていふと思つた。

帰つて額に冷却シートを貼り付けて寝ているとチャイムが鳴つた。何だ今苦しいというのに、と思ひながら玄関の覗き窓に右目を付ける。しかし新聞会社や宗教の人らしきものが見えず、ドアを開けた。しかし誰もいない、と思つたら、足下に子供がいた。たまに朝出会う小学生だ。

「どうしたの、ぼく」

そう尋ねると彼は急に泣き出しそうな顔をして、

「ごめんなさい！」

と叫び僕の向う脛を蹴つ飛ばして駆けて行つた。急な展開だつたので驚いて咳が出たし、子供のキックだというのに弁慶の泣き所からじわじわと痛みが広がつて力が抜けた。目の前が真っ暗になつていく。

次に目を覚ましたときには玄関でブリッジをしていたが力尽きた人のような姿勢で眠つていた。これでは治るものも治らない。早く元気になりなさいよ、と言う最近髪のみ

つきり薄くなつた課長の菩薩の微笑みを思い浮かべ僕は泣きそうになる。しかし謝りながら人を蹴るなんて。もしかしたらガキ大将的な奴にあの子は脅されてやったのかもされない。今や子供におはよう、と言うだけで不審者として通報される時代だというのに、道で会えばきはきはと挨拶をしてくれるいい子である。そうに違いない。

鍵を開けっぱなしだったかと思ひ扉を開ける。やはり開いた。かさりと言う音がして、何だろうと思つてみると、白いビニール袋がドアノブにかかっている。中にはパウチゼリーとおかゆ、スポーツドリンクにりんごと葛根湯が入っていた。これはきつと朝会つたあの美しい人がくれたのだろう。ちよつとすれ違つただけの男にまで優しさをくれるなんて。しかし頭が重い。脛も痛い。鍵を閉めてパウチゼリーを一つ開けて飲みながら、ベッドに戻る。

彼女を初めて見たのは三年前のことだ。アパートの階段でうずくまっているのを、隣の子と二人で助けた事がある。幸いただの脳貧血だったらしいのだが、軽い体と、香水の匂いと、心から申し訳なきような表情が記憶に残っている。寝がえりを打つと頭が痛んだ。イメージ映像はお寺の大きな鈴をがらがら鳴る感じ。インフルでも人は死ぬんだよな、

と気弱な考えが浮かぶ。一人だから、病気だから仕方がない。孤独死。そういえば新聞を取っていないままだ。しかしそのままでもいいやと思ひ直した。

僕の隣には大学生の男の子が住んでいる。深夜でも明け方でも、変な音がしたぞ、と思つたらすぐに隣からドアの音が聞こえる。一番に飛び降りた人に駆け寄つて、通報するのを何回か見た。きつと正義感が強いのだ。助けられるかもしれないと思うのだろう。以前、一命を取り留めた人がいたのだが、その家族はあろうことか隣の子に嫌がらせを始めた。妙なチラシやネズミの死体、ガムテープでドアを張りされているのも見た。ある日赤いペンキで、〇〇高校卒のクズ、などと落書きされていて、僕も消すのを手伝った。彼は始終無表情で、何を考えているのか分からない。結局家族達は逮捕された。そんな嫌がらせを受けても彼は自分の姿勢を崩さない。郵便受けに新聞がたまつていたら、外から部屋に明かりが灯っているのを見たら、彼は僕が死にかけている事に気付くかもしれない。最悪、腐乱死体にはならないですむ。ははは。死にたくない。次の朝には熱は下がっていた。レトルトの塩味のおかゆがひどくおいしかった。

Giant Steps

兄貴は帰ってすぐに横になった。疲れているのだろう。俺は今年受験生だ。私立に行くお金は無い。だから勉強をしなくてはいけない。机の上の奨学金のチラシを三枚見ながら、ため息が出た。気楽に遊んでいられる二年間はあつという間だった。憂鬱だ。一年間も絶えず努力し続けなさいといけないと考えると気が遠くなる。しかし手を抜いたら手を抜いたで、あのとときああしていればと後悔することになるだろう。お前はちゃんと学校に行けよ、と兄貴には何度も言われている。俺の為に早いうちから働きたした兄貴。ぼおつとしたからベランダに出る。文字通り頭を冷やしている。今年から花粉症デビューしてしまったからマスクは忘れなかった。コップから水が溢れるように、ある日いきなりなるものらしい。そうしていると、隣の部屋からギター音が聞こえることがある。もちろんアンプに繋いだ爆音ではなくて、爪と弦が触れ合うかすかな音だ。何の曲を弾いているのかは分からない。頭の中で想像することもできない。たまに女の人の鼻歌とそれが、聞こえることもある。それらはベランダに出ないかぎり聞こえてこない。

ららら、で歌う時もある。それもまたウイスキーボーイスで、何より綺麗な声だから、迷惑に思ったことはない。音楽の先生に歌って、これは何の曲ですか、と聞いたら有名なジャズナンバーだった。俺は音楽の事なんてほとんど分からない。しかしこの声は好きだ。聞いていてほつとする。今日はアタリだ。澄んだ歌声が聞こえてくる。それに、いつもよりも、声が大きい気がした。

うあ、と声がして、隣から戸を引く音が聞こえた。どうやら窓を開けていたらしい。そしてもう一度カラカラという音だ、今度は開けたのだろう。

「誰がいる？」

問いかける声に、俺はベランダから身を乗り出して見た。同じように首を突き出したおかつばの女の子がいた。

「あーやつぱり、うるさくしちゃってごめんさい」

一瞬答えるのが遅れた。夜聞こえてくる歌声は深みのある優しいものだったから、想像していた声の持ち主のは大人っぽい感じの人だった。しかし実際見てみると随分ギヤップがある。多分この人百五十センチあるかないかだ。

「次から気をつけます」

何も言わない俺が、怒っているように見えたのか彼女は

そう言つて頭を少し振つた。会釈のつもりなのだろうか。何か言わなくてはと思つて俺は、迷惑じゃないです、と答えた。前住んでいた家の隣の子供がピアノをやつていたのだが、その練習は同じ個所を何度も何度も、ゆつくりのテンポから速くしていったり、曲が進んだと思つたら引つかかつてそこを繰り返して弾いたりで聴いていていららしたばかりだった。それに比べれば俺はこの人の声を迷惑に思つたことは無い。本当だ。

「高校生？」

「彼女は不意にこう聞いてきた。

「はい」

「何年生」

「三年っす」

受験生か、大変だね。と彼女は言つた。いつまでもこうしては首が疲れそうだなと思つた。

「じゃあ遅くまで勉強してんだ。邪魔してごめんね」

と彼女が言つた。本当に気にしてないから謝るなともう一度言つた。その時、腹がきゆうと鳴つた。恥ずかしくなつて俺はベランダから体を引込めた。本当に気にしないでください、と言ひ捨てて、部屋に戻る。

数学の問題集を開く。微分積分のページを開いて、ノートに問題の番号を振つた。腹がぎゅるる、と鳴つた。無視をする。プラスとマイナスを書き間違えて、消しゴムで消す。さてもう一度、と書きなおそうとして、誤つて正しく書けた部分を消していたことに気付く。落ち着け。腹が鳴つた。無音の部屋だから余計に大きく聞こえる気がした。

とんとん、と玄関の方で音がした。書きなおす。シャーペンシルの芯が折れた。二度振つて、それでは芯が出ないものだと気付いて、ノートに放る。またしても、とんとん、という音がした。玄関に出てみたらさっきの人だった。

「おわびに、お夜食代わりによかったら」

どんぶりいっぱい、クリームシチューが入っていた。私を作ったんじゃないかって、二階のね、男の子が作つてくれたやつなんだけど、そいつ料理がすごい上手くて、これも本当においしいから、よければ食べて、勉強頑張つて。

俺は差し出された黒いどんぶりを思わず受け取つてしまった。うさぎのイラストの描かれたスプーンもついている。

一人で部屋で食べた。二階の男の子つて何なんだ。確かにシチューはおいしくてガツガツ食べた。問題集に目をやる。リミット？ シグマ？ 空集合？ 知らねえ。

Mercy, mercy, mercy

空から女が降って来た。俺が通り過ぎた後ろから何とも言えない音がした。とりあえず近寄る。頭が割れていたから、今なら警察にだけ連絡するだろうが、その時はすぐに一九と携帯のボタンを押していた。人が落ちました。住所は。そのあとで警察を呼んだ。市の中心からは外れたところで、サイレンの音はなかなか聞こえてこなかった。女はかっと目を見開いている。口角には赤い泡がこびり付いている。ひどい顔だった。目を凝らしても、女を突き落とされた犯人、らしき人影は無かった。自分の意思で飛び降りるのだから目を閉じてしまえばいいのに。嫌悪感と腹立たしさが急に襲い来た。五分を少し過ぎたあたりで、救急車が来た。それが初めて見た飛び降りだった。

家に帰って風呂に入ろうとして、服の背中あたりに血しぶきが飛んでいるのを発見した。忌々しい。腐れ縁の悪友に連れられて見に行ったライブで買ったTシャツだった。あまりに血糊は頑固で洗っても洗っても黄色い跡が残ってしまったため、名残惜しかったが写真だけ撮って捨てた。

今日まで七人の人間が飛び降りるのを見てきた。三人は

即死で、二人はしばらくしてから死に、一人は今も半身不随。五階建のアパートというのは、高さから言うると死ぬかどうか微妙な所だ。怖がって三階あたりから飛び降りるから怪我だけしてその後不便な生活をするのだ。

その日飛び降りた男は免許証をポケットに入れたままにしていたから、特定は早かった。他県からわざわざ死にに来たらしい。地元で死ねばよいのと思う。

一時、お前が突き落としたんじゃないのか、と警察に言われるくらい、通報するのが早かった。睨んでみせたら何も言わなくなった。どことなく硬質で、しかしトマトのように水っぽいものを叩きつけるようでもあるあの音が聞こえたら気になって仕方ない。別に助かってほしいとも思わない。自分がすやすやと休んでいるときに外でのたうちまわって死んだ人がいると考えると気味が悪いし、このアパートには小学生も住んでいる。大家はおっとりとしたおばあさんだ。さつさと片付けてもらった方がいかに決まっている。おかげで人が減って家賃も下がって（こちらは楽だが）大家さんは苦しいだろう。監視カメラはつけられてもオートロックに改造することも鉄格子を嵌めてしまうこともできずにいるのだ。

眠りが浅い俺と、昼夜逆転しているぶすこ、不眠症気味のメイコさんはあの物音でいつも起き出してしまふ。パトカーの到着を待つうちに話が弾んで、いつしか互いの家を行き来するまでになった。

家に帰ってテレビを付ける。海外で若者が暴動を起こし、警察とぶつかりあっている映像が流れていた。爆竹と碎けた瓶と罵声。高校時代つるんでいた四人組の一人が留学をしている国だ。小さな火種が数日でみるみるうちに膨らんでこうまでなつた。危険だから帰国しているはずだと思いたいのだが、連絡がつかないでいる。死傷者の数は分かりませんというレポーターの声に心は振れて悲鳴を上げる。

目の前で起きている他人の死は、手を合わせていても心の底はどうでもいいと思っている。いつか死に切れなかつた人の家族に逆恨みされた時も、お節介だ迷惑だ偽善だと騒がれたが、そもそも自分のしていることが善だと考えた事がなかった。もし運悪く生き残ってしまったら俺のしたことは嫌がらせに他ならない。ざまあみろ。悪ぶっている俺格好いい、などと思う歳ではとつくにない。あまりにも彼らが安らかな死に顔からかけ離れた形相で地面に横たわっているから、それを見て俺は、どうしようもなく生きて

いることを感じる。こんな考え方は、世の中にはこんなに不幸な人が居るのだから私たちは恵まれていますね、幸せを噛みしめましょうね、というのに似ていて自分でも吐き気がする。どこか感覚が麻痺している。自覚はある。

しかし友人には生きていてほしいとどうしようもなく願う。借りがあつた。何一つとして返せていない。会いたくない奴がいるからわざと荒れた高校に進学した俺に付き合つて、とても優秀なのに同じ学校を選んだ男だ。常に飄々としていた。ふざけた奴だった。こんなことで死ぬはずがないと思う。しかし冗談ばかりだったから、ある日冗談みたくに消えてしまうのではないかとも思う。

幼なじみから、連絡はない、あいつの親に電話してみる、とメールが届いた。俺はそれを、もう一人の友人に転送する。もう始発が動いている時間だ。外に出たらちやうど、メイコさんとぶすこが、呆けた顔をしていた女を送り出すところだった。橙の朝日に目を焼かれて、ぼんやりと見ていると、黄色い立ち入り禁止のテープを凝視しながら歩いてくる、背の高い人影があつた。

緊張の糸は切れた。浅い呼吸を繰り返す。声の出し方を忘れた俺に、懐かしい顔はそつと右手を挙げて答えた。

Moanin'

一人暮らしを始めるからと母にもらった皿を割ってしまった。そのことがやけに悲しくて悔しくて、チラシに割れた破片を集めていた。指先がびり、と痛む。みるみるうちに血の玉が膨れ上がった。舐めると鉄臭さが鼻の奥に広がる。声を挙げて泣いた。

入学当初仲の良かった子は他の女の子達とグループを作ってしまった。しかし友達は何にもいたから大したことではない。勉強をするために高いお金を出して一人暮らしをさせてもらっている。だから勉強をしないと、いけない、しかし友達づきあいは時々苦しい。教室の前側の机で講義を聴いている人は頭がよさそうに見える。仲の良い人がいても、二言三言休憩時間に話すだけで、授業中は真面目にノートを取っている。だが、私はあまり優秀な方ではないから、真似したってどうしようもない。前々から入りたいと思っで見学しているサークルでは一人の先輩に嫌われているような気がする。かばってくれる人もいるが。地味な文化系サークルの見学に行ったらなんだかのんびりとした雰囲気だった。けれど芸術関係と聞くと、何だか堅苦しい

感じがする。一緒に見学をしていた女の子が、先輩たちにほめられていた。私は素人だし、特別な才能がない。だから入ったところで仕方がない。友達と遊ぶために連休に帰らずにいたら、実家で犬が死んだ。四歳の時から兄弟のように仲良く育ったのに、会えなかった。けれどどうしようもないことだ。

辛い、らしいことにはこれまでも何となくで耐えてこれたのに、なぜ皿を一枚割ったことがこうも悲しいのかわからなかった。

怖い話が好きだった。何だか背筋がぞくぞくとするから、自殺名所案内のコピペが好きだった。いつしか流行らなくなっていたのか最近は目にしなくなっていた。覚えていたフレーズで検索をかけた。四回キーワードを変えて、ようやく見つけることができた。

興味半分だった。本当にそんな場所があるのか、せっかくこの地に住むのだから見てやろう、と思った。帰りのことは全く頭の外に追いやっていたのだから、今考えるところとする。

目の前で人が死んだ。恐ろしかった。もともと、ああ今すぐ死にたくて死にたくてしようがないです、というわけでもなかったから、それに怯えて、今にしがみついた。慣れない路線での帰り道も、可動式の黄色いゲートを飛び越えようとも思わなかった。結果的には来てよかったと思う。

二か月経ち、塾の採点のバイトで近くを通りがかったから、あの日と同じ地下鉄に乗ってみた。驚くことに、あのアパートらしきものは見つからなかった。陳腐な怪談みたいだ。目を細めても背伸びをしても、五階建ての古いアパートらしきものは見当たらない。

諦めて、座って本を開いた。前々からの理想よりも、実際に受けた印象の方が大事だと思つて、私は二番目に見学に行つたサークルにいる。今ほとにかく本を読みたかつた。荘厳で硬質で、美しい言葉を自分の中に収めたかつた。とてもぞつとする体験をした。震えるほどの思いをした。それを外に吐き出してしまうのに、こわいの三文字はひどく軽いように思えたのだ。

地下鉄は高架を伝つた。川が見える。向こうの大きなショッピングモールの屋上には観覧車がある。ふと振り向けば、あのアパートが新しいマンションの間にちよこんと収

まっていた。マンションの陰で見えなくなっていただけらしかつた。

月刊缶じうす新歓号 通巻178号
2011年3月26日発行

編集人 かまたり 蒼井天優

発行所 広島大学文団BOX